

【展示室3】 <新収蔵品展> 作品リスト

周南市美術博物館

2023年 4月22日(土)～5月21日(日) 月曜休館

寄贈作品・・・◆ ※展示順とは異なります。 ※各作家の略歴は裏面に紹介しています。

新収蔵作品						
NO.	部門	作家名	作品名	点数	制作年	材質(形状) サイズ(縦×横cm)
1	美術	宮崎 進	人のいる風景	1	1980年代初め	水彩、鉛筆、クレヨン・紙 86.6 × 80.2
2			海	◆ 1	1951(昭和26)年	油彩・板 31.6 × 41.0
3			静物	◆ 1	1952(昭和27)年	油彩・板 31.3 × 41.0
4			妻の肖像	◆ 1	制作年不詳	油彩・板 45.4 × 37.7
5			海をわたる鳥	◆ 1	1963(昭和38)年	油彩・キャンバス 53.3 × 65.0
6			風景	◆ 1	1982(昭和57)年	油彩・キャンバス 130.0 × 162.0
7		松林 桂月	雪景山水	1	1911(明治44)年	絹本墨画 138.0×49.0
8		高島 北海	菊花図屏風(六曲一隻)	1	制作年不詳	紙本墨画 108.0 × 351.2
9			山水(双幅)	2	大正時代	絹本淡彩 (左)120.5 × 40.9 (右)119.8 × 40.6
10		森 寛斎	柳鶯 賛 大田垣蓮月	1	1869(明治2)年	紙本墨画 135.3 × 51.1
11		河上 大二	田植	◆ 1	1929(昭和4)年	水彩・紙 27.8 × 38.8
12			収穫	◆ 1	1937(昭和12)年	水彩・紙 29.8 × 37.1
13			盆踊り	◆ 1	1946(昭和21)年	水彩・紙 28.5×39.0
14			風景(富海)	◆ 1	1936(昭和11)年	水彩・紙 30.7×37.3
15			風景(高水)	◆ 1	1941(昭和16)年	水彩・紙 28.8×37.2
16		まへだ ばくじ 前田 麦二	このしろ	◆ 1	1973(昭和48)年	油彩、キャンバス 24.0 × 33.0
17			枝豆	◆ 1	1971(昭和46)年	紙本淡彩 32.0 × 40.8
18			桃	◆ 1	1974(昭和49)年	紙本淡彩 27.6 × 24.8
19	歴史	のむら もとに 野村 望東尼	竹画賛	1	制作年不詳	絹本墨画 92.3 × 26.9
20		野口 雨情	虹の松原	1	制作年不詳	紙本墨書 136.6 × 33.8
21		児玉家資料	児玉源太郎書「七言絶句」	◆ 1	制作年不詳	紙本墨書 134.9 × 34.1
22			児玉源太郎書(双幅)	◆ 2	1906(明治39)年	紙本墨書 (左)100.0 × 17.0 (右)100.2 × 17.0
23			乃木希典書	◆ 1	制作年不詳	紙本墨書 13.8 × 43.7
24			山県有朋書	◆ 1	制作年不詳	絹本墨書 118.5 × 34.5
25			後藤新平書	◆ 1	制作年不詳	絹本墨書 135.6 × 42.2
26			御沙汰書	◆ 1	制作年不詳	紙本墨書 23.8 × 78.5
27			古榴弾記	◆ 1	1878(明治11)年	紙本墨書 29.7 × 111.8
28			児玉秀雄自賛自画像	◆ 1	制作年不詳	紙本墨書 132.8 × 33.0
29			勲記(児玉秀雄)	◆ 1	1911(明治44)年	45.3 × 58.4
30		大向出土資料[天目茶碗(1)、青花花文皿(7)、青花梵字文皿(6)]	◆ 14	14～16世紀半ば	陶磁器	
31	写真	初沢 亜利	「東京 二〇二〇、二〇二一。」 ※80点のうち10点展示	◆ 10	2021(令和3)年	銀塩紙

計31件

計 55 点

## 作家略歴

- 宮崎 進 (1922-2018) 洋画家。徳山町(現・周南市)御弓町生まれ。1942(昭和17)年日本美術学校油絵科を繰り上げ卒業、同年入隊、戦後捕虜となりシベリアに抑留される。復員後、上京。1967(昭和42)年第10回安井曾太郎記念賞受賞。1972(昭和47)～74(昭和49)年渡仏、帰国後はアトリエを鎌倉に移す。1995(平成7)年小山敬三賞、1998(平成10)年第48回芸術選奨文部大臣賞、2007(平成19)年旭日小綬章受章。2009(平成21)年から周南市美術館博物館名誉館長をつとめた。
- 松林 桂月 (1876-1963) 萩生まれ。1894(明治27)年野口幽谷に入門。1901(明治34)年同門の松林孝子と結婚。松林姓を名乗る。1907(明治40)年文展に際し、正派同志会に参加。翌年第2回展から連続出品。1919(大正8)年帝国美術院創設。第1回帝展審査員を委嘱される。1950(昭和25)年無名会結成。1958(昭和33)年文化勲章受章。
- 高島 北海 (1850-1931) 萩生まれ。明倫館に学び、維新後大阪生野銀山でフランス人コワニエにフランス語、地質学を学ぶ。内務省地理局、その後農商務省に入り、1884(明治17)年、ヨーロッパへ派遣。翌年フランスのナンシー森林高等学校に留学。1888(明治21)年、フランス文部大臣からオフィシエダカデミー記章贈与。同年帰国。1895(明治28)年、美術協会三等賞銅牌受賞。1902(明治35)年上京、中央画壇にデビュー。日本美術協会の中核作家として活躍。第2～11回文展審査員。
- 森 寛斎 (1814-1894) 幕末明治期の日本画家。萩藩士石田伝内道政の三男として生まれる。京都で森徹山に師事。徹山の養子となる。幕末には国事にも奔走し、勤王志士とも交流があった。1880(明治13)年京都府画学校出仕。1882(明治15)年第一回内国絵画共進会銀賞受賞。1890(明治23)年第三回日本美術協会展「後赤壁図」銀牌、同年帝室技芸員。明治期京都画壇の重鎮。
- 河上 大二 (1893-1949) 東京生まれ。神戸須磨で幼少期を過ごす。1918(大正7)年東京美術学校(現・東京藝術大学)西洋画科卒業。1921(大正10)年療養のため徳山に転居。1926(大正15)年前田麦二、久保白船らと徳山洋画協会を結成。1927(昭和2)年帝展に「暮れ行く漁村」が初入選、以後毎年帝展に出品。1946(昭和21)年に結成された防長美術家連盟に参加。1947(昭和22)年日展委員。
- 前田 麦二 (1891-1974) 1891(明治24)年下松生まれ。のち徳山に転居。1926(大正15)年河上大二、久保白船らと徳山洋画協会を結成した。1929(昭和4)年に岸田劉生が徳山へ来た折には共に写生に出かけるなど交流をもった。椿貞雄に勧められ1931(昭和6)年に「小樽の風景」を国画会に出品し入選した。戦後は1946(昭和21)年に結成された防長美術家連盟に参加。1959(昭和34)年徳山市文化功労者。1971(昭和46)年昔の生活や風俗を記録した「徳山の思い出」を制作し1973(昭和48)年に画集『徳山の思い出』として出版した。
- 野村 望東尼 (1806-1867) 江戸末期の女流歌人。本名もと。「もとに」は「ぼうとうに」とも。福岡藩士野村貞貴の後妻となり、夫没後剃髪。和歌を大隈言道(ことみち)に学ぶ。勤王の志があり、高杉晋作、西郷隆盛らと親交があったため捕えられて姫島に流された。家集『向陵集』、歌文集『上京日記』『姫島日記』『夢かぞへ』などの著作がある。
- 野口 雨情 (1882-1945) 民謡・童謡詩人。茨城県多賀郡磯原村(現・北茨城市)生まれ。1902(明治35)年に東京専門学校(現在の早稲田大学の前身)中退。この頃から『小天地』『労働世界』に詩を発表。社会主義詩人児玉花外の影響を受けた。1905(明治38)年刊行の『枯草』に4篇の民謡体を収め、1907(明治40)年月刊民謡集『朝花夜花』を出し、以後民謡詩人として名をなす。その後北海道での新聞記者を経て、1919(大正8)年詩壇に復帰。土着的叙情性の豊かな民謡と童謡を発表。代表作「船頭小唄」「波浮の港」「七つの子」「赤い靴」など。
- 児玉 源太郎 (1852-1906) 陸軍軍人、政治家。徳山藩士児玉半九郎の長男として徳山の本丁(現・児玉町)に生まれる。1859(安政6)年、藩校興譲館に入学。戊辰戦争では献功隊の半隊司令として東北、函館を転戦。維新後は兵学寮に入り、卒業後に参謀として佐賀の乱、西南戦争などの反乱鎮圧で活躍した。1887(明治20)年には陸軍大学の初代校長を務め、日露戦争開戦後は満州軍総参謀長として大陸に渡り、日本陸軍の勝利に貢献した。政治面でも手腕を発揮し、陸軍大臣、文部大臣、台湾総督などを歴任。日露戦争終結後、脳溢血で急死。
- 初沢 亜利 (1973-) 1973(昭和48)年フランス・パリ生まれ。上智大学文学部社会学科卒業。第13期写真ワークショップ・コルプス修了。イイノ広尾スタジオを経て写真家としての活動を開始する。2013(平成25)年東川賞新人作家賞、2016(平成28)年日本写真協会新人賞、2019(令和元)年さがみはら写真新人奨励賞受賞。現在、東京を拠点に活動を続けている。